

# 高槻市史

第一卷本編Ⅰ



大王陵(今城塚古墳)と庶民の墓(狐塚古墳群)



三好長慶画像（京都・大徳寺聚光院所蔵・京都国立博物館保管）



夕日に浮ぶ観の木(市内西真上一丁目・笠森神社内)



富田東部の条里遺構 (空中写真・1948年撮影・約1万分の1・上が北)



重要文化財 千手観音坐像（市内浦堂本町・安岡寺所蔵）



重要文化財 聖觀音立像（市内大字原・本山寺所藏）



文禄三年東天川村検地帳〔二冊本〕（森田家文書）



へびまつり実景（上：参道を練る，下：的をつけた蛇体）  
（市内大字原・八坂神社）

## 序

ここに、市民各位の待望久しかった『高槻市史』第一巻、本編Ⅰが刊行の運びとなりました。

わが高槻市は、緑の山々を背にし、とうとうと流れる淀川に面し、古来より水陸の要衝にあります。この地は弥生時代において既に人々のなりわいがあり、その後には西国街道の宿場町として、また高槻城の城下町として栄え、現在では市域の変更や転入者の激増によって人口三三万余を擁するベッドタウンに膨張し、なお急速な変化を続けております。

かつては山や河により画された地域ごとにあった人々の生活も、近時は鉄軌道や幹線道路の敷設、宅地化、更には一定区域の用途を指定するなど人間が作り出した条件によって大きく左右されつつあり、流れゆく歴史の中で現代はその面からも大きな分岐点と言えましょう。

こうした市域の開発は、緑を削り田畑を埋め、街並みを塗り替えたに止まらず、各種の貴重な資料を散逸させ、伝承の習俗を消滅させてしまっておそれを引き起こしております。

この時において、私達の先人が数知れぬ変事や戦乱の中でその生活を維持し文化を受け

継ぎ守り育てるには正に血のにじむ努力があつたことを思うとき、これを後世の人々に正しく少しくでも詳しく伝えることは私達世代の当然の責務であると考えるものであります。

この市史の刊行は、市民各位の高い文化意識と郷土愛に支えられ、さらには、小中学生や学生のみなさんにも理解できるような内容に編さんを心がけ、昭和四八年の市制三〇周年記念事業として企画されたものであり、昭和四四年十月以来、現奈良教育大学学長井上智勇先生を委員長とする高槻市史編さん委員会にお願いしているものであります。

今日、私は「全市民で考える市政」を提唱しておりますが、こうした観点からも、この書を通して、幾多の先人の跡を顧み、未来の発展に資していただければ、はなはだ幸いに存するものであります。

ここに、編さん委員の諸先生、数々の貴重な資料を御提供くださった史料所蔵者各位をはじめ、あたたかい御援助、御協力をくださった市議会ならびに市民各位に、厚く御礼申し上げます。

昭和五二年一月一〇日

高槻市長 西島文年

## 序文

高槻市がその市史編さんを本格的に企図したのは昭和四四年であった。時の市長吉田得三氏は、昭和四八年一月に迎える市制三〇年の記念事業の一環として高槻市史の編さんを決意し、私にその委員の選定を依頼した。私は母校の京都大学に赴き、考古学、日本史学、人文地理学の教官と協議して委員を選び、これを市長名で依頼することとした。

委員会は論議を重ねた結果、およそ次の点に留意することを確認した。①記述すべき内容の時間的下限を昭和五〇年とし、発掘される考古資料のうち収録されるものは、これを昭和四七年に発掘されるものまでのものとする。②高槻市の歴史がそこにおいて展開した地理的環境を、自然・人文両面から明らかにする。③本市史の記述は、常に、近接地域のみならず、日本史全体の発展と関連づけつつ把握して行う。④あくまで客観的学術的であると同時に、一般市民にも読みやすく親しまれやすいものとする。

思うに高槻市は、まさに考古学的遺物の宝庫である。幾千点となく出土している遺物や個人所有となつている考古資料のうちから、約二千点を選別することは、それだけでも委員にとって容易な仕事ではなかつた。また高槻市内の各地区に保存されている文書や、多

くの旧家に眠っていた文書を見出し、これを一々調査し収集するのにも、予想外の時間と労力を要した。また委員は、東京大学史料編さん所、宮内庁書陵部、内閣文庫、国立国会図書館、京都大学古文書室、奈良教育大学図書館、関西大学図書館、熊本大学図書館、聖心女子大学図書館等を歴訪して、関係文書を渉猟し調査しなければならなかった。こうして収集した文書資料は実に五万点を越えた。

集積した考古資料と文書資料とを、整理し統一して、まず史料編として上梓し、これを基礎として本編を記述したのである。したがって本市史は極めて学術的香りの高いものであるが、他方一般市民にも親しまれやすいものであることを期待している。

本市史の完成は当初に予定した時期より遙かに遅れたが、本市史編集が予想外に労苦の多いことを理解して、温く許容された市当局、市会議員各位に衷心より感謝するとともに、困難な事務に耐えた事務局の諸氏にも深い敬意を表したいと思う。

昭和五二年一月一〇日

高槻市史編さん委員会

委員長

井上智勇

## 凡 例

- 一、本書は『高槻市史』のうち第一巻本編Ⅰとして編集したものである。
- 一、本巻の時代区分は「原始・古代・中世」とし、中世と近世の過渡期を「戦国動乱期」とまとめて、その下限を、いちおう慶長五（一六〇〇）年関ヶ原の合戦に置いた。これ以後は本編Ⅱで扱う。また原始時代については考古学的区分に従った。
- 一、年代表記については、太陰暦時代は和暦（日本年号）を主にし、西暦をカッコで括り、太陽暦時代は西暦を主にして和暦をカッコに入れた。なお、南北朝については、各章ごとの初出にかぎり、いずれの年号かを示した。
- 一、かなづかいは、引用史料・引用文献以外は現代かなづかいで統一した。
- 一、漢字はできうる限り当用漢字を用いたが、引用史料・人名・地名・歴史的用語等には止むをえず旧漢字を用いたものもある。なお、難読と思われるものには初出にかぎりフリカナをつけた。
- 一、引用史料はできるかぎり読み下し文にし、あるいは説明を加えて平易にした。
- 一、引用史料・引用文献の出典は、文末に「〔 〕」で簡略割注した。このうち、「古代」、〔二五〕などあるのは

高槻市史第三巻史料編Ⅰ所収の史料番号を示し、<sup>〔近世〕</sup>などとあるのは高槻市史第四巻(一)史料編Ⅱの各章別史料番号を示したものである。

一、写真・図版・表は、それぞれ写・図・表と略記して番号をつけ、巻末に目次をつけた。出典表示や所蔵者・提供者等の表示は、できるだけ簡略化し、目次で完全表示をつけた。その他の注記は、目次では省略した。なお本編で使用の昭和二三年撮影の空中写真はすべて建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の一万分の一空中写真を複製したものである。(承認番号)昭五一総復第一五四一号。

一、教詞は原則として洋式漢数字表記とし、万位に「万」を入れた。ただし、太陰曆時代の日付だけは、和式表記とした。

一、度量衡のうち、歴史的度量衡については、とくに現法との比定を行わなかった。しかし、実測量と関連する場合は、メートル法で表現、または注記した。

一、文中の歴史的人名は敬称を省き、その他の人名については、担当著者の記述に従って統一しなかった。

一、補注は、本文中に\*印で示し、小見出しの区切りごとに挿入した。

一、付図として古代・中世の歴史地図および地質図(多色刷)各一枚を添付した。

一、史料等の提供者、調査先一覧、および索引は、本編Ⅱに一括する。

一、表紙本扉・背表紙・函題箋等の題字は、前市長のものである。